

十代藩主直諒の夢

ごあいさつ

新発田藩第10代藩主溝口直諒は博学であり、才能に溢れ、時代の行く末を洞察する見識を備えた名君でした。今回の企画展では溝口直諒の業績を紹介します。直諒は健齋の号で多くの著作があり、この中でいち早く尊王開国論を説いて新発田藩が明治維新を乗り越えるための指標を示しました。また、大名茶人翠濤として、石州流越後怡溪派を創設して茶道の普及に努めました。広い交友関係をもとに多くの茶道具を収集し、膨大なコレクションを残しました。また、画人景山として多くの作品を残しました。本展では様々な分野で活躍した直諒の記録や作品を展示し、現在の新発田の文化にも大きな影響を与えた直諒の人物像を紹介します。どうぞごゆっくりご覧いただき、悠久の歴史に思いを巡らせていただければ幸いです。最後に本展の開催にあたりご協力いただきました皆様に心からお礼申し上げます。

1. 第10代藩主として

溝口直諒は寛政11(1799)年に第9代藩主直侯(のちのなおとき)の嫡子として生まれました。父の直侯は享和2(1802)年に24歳の若さで亡くなったため、直諒が第10代藩主になったのは、まだ4歳の幼少期で、幕府老中職の後見を得ながら治世を進めました。

その頃の新発田藩は新田開発の効果が上がらず、幕府から命じられて越後国内の領地と、奥州3郡(現在の福島県の一部)が交換されたこと、水害・地震の復旧や、ロシアの南下政策に伴う日本海沿岸の警備強化などで、支出が重なり、慢性的な赤字財政に苦しんでいました。このような中、直諒は15歳には政事に携わるようになりました。そこで儉約令や農業に精を出した人を表彰して農業人口を増加させ、生産力を上げる政策をとりました。しかし、効果は思わしくなく、日本海や佐渡の沿岸の警備にあたる準備のために富裕な商人・農民から借金をしなければならない状態でした。

天保(1838)年に40歳で家督を嫡子の直溥に譲り、隠居します。その後、執筆活動をはじめ、茶道を広めるとともに、絵画を描くなどの余生を過ごした後、安政5(1858)年に60歳で没します。



「新発田藩第10代藩主溝口直諒像」

2. 溝口健齋として

溝口直諒は「健齋」と号し、隠居後に本格的な執筆活動を進めます。その著作によれば、新発田藩藩校の道学堂で教えていた山崎闇齋学派の朱子学に基づいて勤王を説き、異国船の来航に端を発した極東アジアの国際情勢を鑑みて海防や対外交渉の必要性を述べていました。また、道学堂を建てた8代藩主直養の方針を引き継いで、教育の重要性を説き、君主・執政・教師が同じ方向を向いて奮い立つことが必要であると述べています(新潟県1983)。

当館所蔵の「見廟 御筆録」(見廟とは直諒の戒名から一字とった呼び名)と記された文箱に、健齋の著作をはじめとする文書32点が収められています。このうちの「筆録目次説」は60余冊にのぼる健齋の著書が示され、藩主・家老・家臣ごとに読むべき観点や順序を記した読書案内のかたちをとっています。また、海防や異国船対策について述べた著作も多く、開国の必要性についての考えを記しています。

また、これらの中には「林復齋訂正記」・「林復齋朱批二説」が含まれています。林復齋はペリー提督が率いるアメリカ艦隊が、嘉永6(1853)年に浦賀に来航した際に幕府側の交渉代表を務めた人物で、安政元(1854)年の日米和親条約の締結にも直接携わっており、著書の『墨夷応接録』でその時の様子を詳細に記録しています(森田2018)。復齋は、幕府直轄の儒学教学最高機関として知られる昌平坂学問所の総教(塾頭)を勤めており、健齋の著書、「先諭録」・「報國説」に対し、復齋本人が幕閣の立場から意見を述べていたようです。このことから直諒の考えが、当時の最高学府にも知られていたことがわかり、議論の対象として、直諒も復齋の批判を受け止め、分析し、さらに自身の考えを深めていたようです。

2. 「萬年松風」

本作品は小堀宗本が「萬年」・「風」の書を、溝口景山が「松」の画を分担して一つの作品に仕上げています。このため、表題を「萬年松風」としました。

「松風」とは、茶釜で沸騰する湯の様子を表現する際に用いる言葉です。また、「萬年松」は、日本名イワヒバのことです。1,101年に中国で編纂された禅宗史の一つ『續燈録』に「千年鶴鳴華表柱 萬年松在祝融峰」と記されています。祝融峰は湖南省衡山県にある衡山の最高峰で、中国の伝説上の人物、火の神・夏の神・南方の神とされる祝融ここに葬ったと伝えられています。また、中国南宋時代の僧介石智朋の詩の一節に「萬壑松風供一啜」(ばんがくのしょうふういっせつにきょうすニ幾つもの谷から昇る松風と共に一気にお茶を啜り、雄大な自然を体内に取り込んで洗い清める)という言葉があります。本作品もこれらの逸話を意識して考案されたのでしょうか。茶室の床の間に飾るための形をとっていませんが、茶の湯の精神の根底にある禅宗の教えを意識した翠濤(景山)と宗本との合作です。

茶道遠州流の宗家八世小堀宗中、九世宗本父子と溝口翠濤の交流はよく知られており、文久2(1862)年頃以降に詠まれた和歌の添え書きから、翠濤がかつて主宰した茶会に宗中・宗本らが出席していたことがわかります。また、翠濤と宗中との関係を示す具体例として、両者の合作が示されています(宮武2016)。この資料は、同様に翠濤・宗本の交流を示す一例で、茶の湯を通じた両家の関係が自然体のまま、末永く続くことを願って制作されたとみることができます。

また、安政2(1855)年、溝口健齋が「報國論」を記し、尊王開國論を提唱した直後に創作した、「報國画」に「朝陽赫々、萬古普照、是萬年緑なる松」の画など六枚が描かれています(梅田1907)。これらの画は「当時の時勢を諷刺する寓意を含む」といわれ、朝陽を天皇に例えて尊王を唱え、暗に幕府の政策への不満をにおわせたと解釈できます。健齋はこれを親交のあった京都奉行浅野長祚に贈り、浅野から学習院の座田維貞、公家の近衛忠熙を経て孝明天皇がご覧になることとなりました。また、近衛忠熙に仕えていた老女村岡も加わり、その後、健齋の『報國説』・『勸学説』などが、天覧される道筋が整えられました。座田維貞は、薩摩藩士の有村俊齋を介して月照や西郷吉之助(のちの隆盛)と接点があり(若井2014)、村岡は薩摩藩から近衛家の養女となって將軍家に嫁いだ天璋院篤姫の母親代わりとして一緒に大奥に入った女性です。このように、健齋の尊王論を天皇に取り次いだ人物の中に薩摩藩と関わりがある人物がいることは興味を引きます。その後の戊辰戦争にあたり、奥羽越列藩同盟に加わって敵対関係にあった新発田藩と新政府側との交渉や、薩摩藩の軍艦による大夫浜の上陸、西郷隆盛の駐在に至る背景を思うと、この時の直諫(健齋)の著作による尊王に対する思いが、後の新政府軍司令部の担い手に伝わった可能性を考えたいと思います。



「萬年松風」(小堀宗本・溝口景山の合作)

3. 新発田藩の茶道

鎌倉時代、薬用に用いるため禅宗の寺院に取り入れられた喫茶の習慣は、村田珠光によって茶道として創始され、武野紹鷗を経て千利休によって大成されました。茶道は江戸時代に入ると、二つの流れが生まれます。一つは古田織部・小堀遠州によって踏襲された大名をはじめとする武家の嗜みとして発展した遠州に代表される「きれいな寂び」です。もう一つは利休の後を継いだ千宗旦や、そこから派生した表千家・裏千家・武者小路千家により、町衆を中心に広まった「詫び茶」の流れです。武家の茶道は禅宗の流れを受け継ぎ、書院に席を設け禅の教えを記した書を飾り、武家社会の思想を背景に置くものでした。これに対し、町衆を中心とした流れは、無駄を排除し、草庵と呼ばれる狭い茶室の中に凝縮した世界を創ることで精神性を高めるものでした。この流派は後に茶道を家業とするの専門集団へとつながってゆきます(小堀1983)。この二つの流れはお互いに影響を与えながら様々な流派へと発展してゆきます。

溝口家の茶道は、5代藩主重雄の頃に遡り、石州流怡溪派の流れを汲んでいます。石州流は、三代將軍家光の茶道指南として仕えた小堀遠州の後、遠州に推薦されて4代將軍家綱の茶道指南を勤めた片桐石見守貞昌が興した流派です。重雄は、貞昌の弟子大徳寺住持の怡溪から教えを受け、茶道を新発田に持ち帰ったとされます(新発田市1980)。ただし、新発田城の江戸時代初期の出土品の中にも茶道具が含まれるため、喫茶の習慣は流派はともかくとして溝口氏入封期にはあったようです(新発田市委2001)。重雄はまた、幕府御庭方の縣宗知を新発田に招き、清水谷御殿で茶会を催せるように作庭の指導を得ています。縣宗知は茶席会場の整備だけでなく、宗知を介して小堀遠州旧蔵の茶道具類が重雄に渡ったとされ(宮武2016)、新発田の茶道文化に影響を与えました。



清水谷御殿庭園

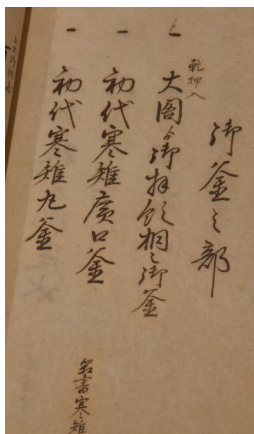
4 茶人翠濤として

溝口直諒は、怡溪の弟子伊佐幸琢の流れをくむ阿部休巴に学び、石州流怡溪派からさらに一派を独立させて越後怡溪派を樹立して宗匠となり、溝口翠濤を名乗りました。新発田藩士の中にも休巴の指導を受けて茶道を学ぶものが増え、藩での茶道が隆盛を迎えたのもこの頃です。翠濤は江戸での茶会を通じて茶人との交流を広げ、古器物の収集・研究を進めました。



新発田御道具帳ほか（明治7（1874）年頃）

当館所蔵資料の中に翠濤をはじめとする溝口家が収集した道具類がまとめられた道具帳が複数確認されており、これらの分析が進められています（浅倉・岩本・原2013、宮武2014）。これらは蔵帳とも呼ばれ、松平不昧による「雲州蔵帳」（赤沼2018）が著名です。ここから大名茶人として収集した道具類の内訳だけでなく、所蔵者履歴・収集者の鑑識眼・当時の価値観を読み取ることができる貴重な資料です。道具帳に記された器物は、江戸時代末期から明治時代にかけて、経済的な事情により所有者の手を離れることが多いものの、丹念な調査により照合作業も進められています。当時、溝口家がこれらを所蔵していた根拠になるだけでなく、道具帳を見るだけでも、どの様にこれらの品々が評価され、大切にされていたかを窺い知ることができます。「新発田道具帳」は記載内容から翠濤が亡くなってから、11代藩主直溥が亡くなるまでの16年間（安政5（1858）年～明治7（1874）年）の間にまとめられたと推定され、翠濤およびそれ以前の溝口家が収集した道具類をみることができます。この目録の中には、「名物」と呼ばれる茶入や、「太閤方拝領桐之御釜」（豊臣秀吉の旧蔵品）が含まれており、明治時代以降の収集家を経て、国内の博物館・美術館で公開されています。



太閤方御釜の記載

5 茶室にみる石州流

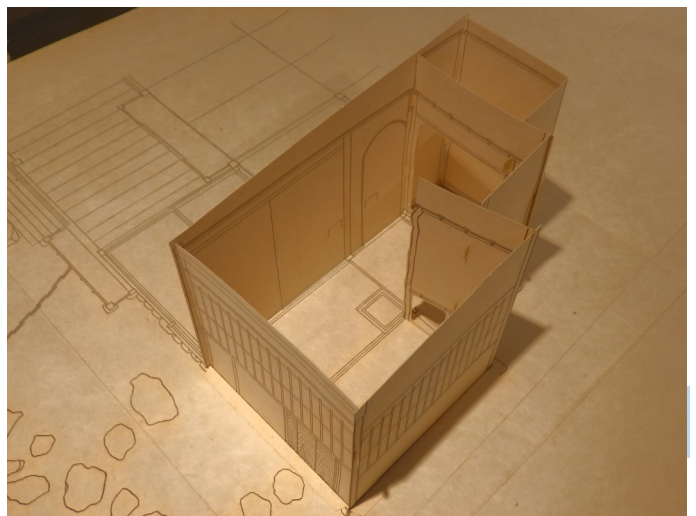
茶室を建設するにあたり、著名な茶室の見取り図を和紙に描き、壁面を折り曲げて立体的な模型を作り、設計の参考資料としていました。これを「茶室おこし絵図」といいます。当館が所蔵する復刻版の茶室おこし絵図から、片桐石見守貞昌が好んだ茶室を紹介します。

慈光院書院・茶室〔奈良県大和郡山小泉町〕

慈光院は大和國小泉藩の第2代藩主片桐貞昌が父の供養のために京都大徳寺の末寺として建立した臨済宗の寺院です。書院（客殿）の奥（北側）に本堂（仏殿）を配し、本堂の東側、書院隅の北東広縁の先には、奥に亭主床を配した二畳の茶室を設けています。

大徳寺高林庵茶室〔京都府北区〕

大徳寺は大燈国師が正中2（1325）年に開山した臨済宗大徳寺派の大本山で、石州流怡溪派の怡溪和尚もこの住持を勤めていました。武野紹鷗が好んだと伝えられる高林庵茶室を、残っていた記録をもとに江戸時代のはじめに片桐石州が再建したと伝えられています。



慈光院茶室おこし絵図（堀口1966より）

本丸御殿内の建物配置を記した「新発田城中御間柄全図」によれば、本丸御殿の中に御茶所（茶室）があります。来客者に対応するための会所の役割を担った書院に隣接するのではなく、御居間・新居間・書齋に囲まれたプライベートな空間に配置されています。石垣背面の御庭を経由して御門を通り御茶所へ向かう露地が想定され、茶室は4畳に半畳の床の間が配置されています。

また、縣宗知が作庭に携わった庭園を持つ、城下の清水谷御殿の書院造の数寄屋、郊外の五十公野御茶屋でも、茶会が催されていました。

6 画人景山として

溝口直諒は景山の号で絵画の作品を残しています。直諒が藩主を勤めた文政年間(1918～1829)に狩野派の林璘^{はやしりんちよう}潮を藩のお抱え絵師とし、以後、勝鱗・晴春の三代にわたって林家が新発田藩のお抱え絵師を勤めました。景山も璘潮・勝鱗の指導を得たとみられます。「蓄蔵物品目次」によれば、狩野尚信・久隅守景の作品が保管されており、北方文化博物館には景山が画風をまね、「守景」・「尚信」と記された習作・画帖が残っています。景山が所蔵していた狩野尚信筆の「猿猴図」(宮武2015)と景山自筆の「猿猴指月の図」・林璘潮筆「猿猴指月の図」(野村1988)の類似など、景山が所蔵する作家の作品を手本としていたと考えられます。

7 直諒の作品

瑤池萬壽觴[文政2(1819)年]

瑤池は中国の伝説にある崑崙山^{こんろん さん}にある池で、伝説の仙女西王母がいたとされます。觴は盃のこと。直諒書

保食神[天保4(1833)年拝領]

保食神とは日本の神話に登場する神のことで、この屍から家畜や穀物が生まれ、天照大神はこれらが民にとって必要な食物であると述べ、田畑の種と定めました。直諒落款

夢と蝶 [制作年不明]

夢の書と2匹蝶の画が描かれています。「御掛物帳」の中に不昧公(松平不昧)筆の「夢蝶」があり、本作品との関係が注目されます。翠濤庵一筆

参考文献

赤沢多佳2018『雲州蔵帳』の茶道具』淡交 別冊 松平不昧 茶の湯を極めた松江の名君』淡交社

浅倉有子・岩本篤志・原直史2013『新発田藩道具帳集成』新潟大学人文学部原直史研究室

野村瑞典1983『翠濤侯遺芳集』汲古堂岡仙

小堀宋慶編 1983『遠州流 茶道宝典』上 東京堂出版

茶道怡溪会1956『石州流怡溪派歴史』

新発田市史編纂委員会 1965『新発田市史資料編第2巻新発田藩史料(1)藩主篇』

新発田市史編纂委員会 1980『新発田市史』上巻

新発田市教育委員会2001『新発田城跡発掘調査報告書』III

新潟県1983「解説」『新潟県史資料編11』

堀口捨己1966『茶室おこし絵図集』第9集 墨水書房

宮武慶之 2014 「新発田藩御道具帳にみる溝口家旧蔵の茶道具」『文化財情報学』9巻2号

神農像 [天保5(1834)年 複製品]

神農は中国古代の伝承に登場する三皇五帝のひとつで、医薬と農業を司る神といわれています。直諒は自ら描いた神農像を藩の医学館に渡し、医学の発展と医療技術の普及を望みました。直諒書

富士見西行図 [制作年不明]

旅装束の僧が座して富士山を望む姿を描いた水墨画。翠濤画一筆

松竹梅図 [文政11(1828)年拝領]

吉祥題材の松竹梅を描いた水墨画。景山筆

8 明治時代の石州流

明治6(1873)年「新発田藩士族名寄帳」で、十六石の禄を得ていた香川玄意(のちの新発田町長香川鍊弥の家系)の家に伝わる史料の中に、明治時代の新発田石州流の様子がわかる資料が残っています。香川玄意は藩茶道職の清泉庵藤田又太夫(友巴)、怡然庵塚野吉次郎から学んでいます(新発田市1980)。「石州三百箇條」をはじめとする教本や聞書に記録にとどめているほか、手引書には詳細な図を記し、茶会の手順を示しています。また、明治22(1889)年6月18日に有栖川宮親王を五十公野御茶屋に招いて開催した茶会の記録も残っています。

これらの資料から新発田藩が廃藩された以後も茶道がこの地域に浸透し、広く嗜まれ伝承された様子がわかり、新発田のおもてなし文化の伝統を学ぶことができます。

宮武慶之 2015 「拾遺・「御掛物帳」にみる溝口家旧蔵の書画」『新潟県文人研究』第18号

宮武慶之2016「高麗堅手鉢子茶碗銘《白妙》について」『野村美術館研究紀要』第25号 野村文華財団

森田健司2018『現代語訳墨夷応接録—江戸幕府とペリ—艦隊の開国交渉』作品社

若井勲夫2014「座田維貞-和氣清麻呂の顕彰者-」『京都産業大学論集 人文科学系列』47

新発田市立歴史図書館 令和元年度夏季企画展

「十代藩主直諒の夢」配布資料

執筆・鶴巻康志(新発田市立歴史図書館)

編集・発行:新発田市立歴史図書館

新潟県新発田市中心4-11-27

刊行:令和元年7月6日